



稲沢ロータリークラブ週報

承認日：昭和38年(1963年)12月6日 会長：西村郁夫／副会長：樋田克史

例会日：毎週水曜日 12：30～13：30 幹事：永井伸治

編集：広報会報委員会

例会場：尾張大國霊神社（国府宮） E-mail rcinazawa@gmail.com

稲沢市国府宮一丁目1番1号 URL <http://www.inazawa-rc.org/>

事務所：〒492-8213 稲沢市高御堂1-2-1（林商事ビル1階）

電話：0587-24-0740 FAX：0587-22-7213 事務局携帯電話 090-4853-5262



2014-2015R.I会長
ケイ-C.K.ホフ

稲沢 RC2014～2015 年度会長方針
「輝いて未来に継ごう」

本日の例会プログラム 第2515回例会 4月22日(水)

例会場：尾張大國霊神社 卓話：モザイク彫刻家 碧亜希子 様

テーマ「私の背中を押してくれたロータリー」 紹介者：直前会長 岡田義夫

IAC例会 (17:00)

第2514回例会報告 4月15日(水) 曇りNo.37

☆点	鐘☆	会長 西村郁夫
☆司	会☆	会場委員 鈴木雅博
☆唱	和☆	それでこそロータリー
☆ビジター☆		
☆会長挨拶☆		会長 西村郁夫



皆様こんにちは。このところ毎日お天気が不順でございます。皆様も体調を崩さない様、気を付けて頂きたいと思ひます。先日4月10日金曜日ベトナム・グレンハイヴァンさんの奨学期間の1年間が終了し歓送会がありました。たくさんのご出席ありがとうございました。又、その翌日の土曜日には、2015～2016年度の第3回準備理事会及び準備委員長会議が開催されました。いよいよ、いよいよ私の年度が残り少なくなってきました。複雑な心境の毎日でもあります。

そんな折、何気なく新聞を読んでおりましたら、リーダーシップに不可欠な事と言うタイトルが目に入りました。今までに会長エレクトの時からリーダーシップとはと言う事でさんざん勉強して参りました。と言うよりも聞かされて来ましたが、今さらリーダーシップの記事などと思ひながら、つつい読みでしま

ました。その記事の内容とはグローバルな時代になり、世界のリーダーの行動が日常と関わる用になったが、そこに高い倫理観に基づく理念を感じる事が少ないというような事が書いてありました。とても私には分かりにくい記事であります。そして社会での成功の為に必要なリーダーの資質として12項目の価値リストを紹介しております。それは、[節制][沈黙][規律][決断][節約][勤勉][誠実][正義][中庸][清潔][平静][純潔]以上の12項目です。どれも私には無い物ばかりでございます。この項目以外にまだ一番大事な事が1つ抜けていると書いてありました。それは何だと思われまスカ？それは謙虚さだそうです。この謙虚こそが世界を救うそうでございます。ま、そうかどうかは議論の分かれ所でございますが私もこれまでに大した事も出来ずにやってまいりましたが13項目の1つ謙虚さだけでも忘れずにこれからあと少しでございますが頑張っていきたいと思ひますので、宜しくお願い致します。ありがとうございました。

★出席報告★ 報告者：会員組織委員長 樋田文裕

会員総数	53名	前々回修正	4月1日
出席	34名	出席	33名
会員数	(内免除者7名)	会員数	(内免除者7名)
欠席者数	19名	マークアップ数	8名
	(内免除者6名)		
出席率	72.34%	修正出席率	87.23%

☆例会臨時変更通知☆

クラブ名	月/日(曜日)時間	マークアップ会場
一宮北	5/22(金)12:30	一宮商工会議所
名古屋北	5/22(金)12:30	名古屋東急ホテル
名古屋城北	5/26(火)	受付なし
一宮中央	5/27(水)18:00	一宮商工会議所

今週のマークアップ

栗本貢、加藤太平、原武史、山内健嗣、高桑宏幸、足立三千夫 (C.O.M)
大崎直文 (岩倉) 山田典永 (名古屋瑞穂)

☆例会日程☆

4月29日(水)	5月6日(水)	5月13日(水)12:30	5月16日(土)
休会(祝日・昭和の日)	休会(振替休日)	幸福例会・会員表彰 2014-15年度第11回理事会 (例会前11:30～) 2015-16年度準備理事&委員長会議 (例会後13:30～)	春の家族会 「ウー少年合唱団鑑賞と東急ホテルのお食事を楽しむ」 開演 19:00 食事 19:30～(予定)

ました。その後、疎開先の奈良県の中学、高校を卒業しましてそののち京都の学校へ4年通いましたが、卒業の年の昭和29年、これまた「学校は出たけれど」と新聞紙上で社会問題として扱われました受難の年であり、就職が大変困難でございました。

それでも新聞社におりました伯父の縁故でやっと名古屋の百貨店へ入社しました。初任給七千円、これが嬉しくて高校の担任だった先生へ報告とお礼にコーヒー茶碗を贈ったものでした。

百貨店と云いまして老舗の百貨店ではなく、地上3階までの創業百貨店として、当初硝子陶磁器家庭用品の売り場へ配属されました。そしてその二年後、地上6階までの増築に伴い、画廊が新設されてそこへ異動となりました。人事部長に尋ねましたところ、入社の際に提出しました履歴書の、趣味の欄に“絵画”と書いておきましたのがその理由で、これが今日に至るなりわいの宿命となった次第でございます。

新設の部署ですから、精通した先輩など誰も会社にはおりません。業界大方のアドバイスを受けながら毎週の画廊催事に追われる毎日でございましたが、新米の特典、大抵の事は頭をかけば許されたものでした。

今では百貨店画廊の作品には殆ど販売価格が表示されておりますが、当時昭和30年代は、作家に失礼だと云う事で値段は表示していませんでした。と云いますのはそれは、作家に対する作品代金は制作して頂く「謝礼」でありましてつまりは画料なのですが、作品代金等と云ったら玄関払いの時代でした。もっとも人気作家においての話でしたが。

百貨店の画廊はシャワー効果を期待して最上階に作るのですが、とはいっても百貨店の売り場ですから毎月の売上予算がありまして苦慮したものです。何しろ価額の付いていない商品を売るのであります。当時日本画巨匠展では、展覧会の名前に必ず「東西」としなければなりませんでした。今日多くの画家が関東中部にアトリエを構えていますが、市場性等様々な理由がある様です。それは、かつて「塾」という師弟の関係が強固、今日では大学の教授と学生の関係になってきたことにもよりますが、東西の均衡が崩れ、西高東低ではなく、正に「東高西低の気圧配置」のごとくなっているようでございます。しかし、半世紀前には西日本特に京都に有名日本画家が多くおられました。それで、「東西現代有名日本画巨匠展」と銘打って展覧会を企画する必要があり、そして少なくとも一年前には出品してもらう作家のリストを作成し、予約の前渡し金を準備して、各作家に対して出品依頼で奔走するのが慣わしでした。

今なら有力画商諸氏に依頼するという手抜きもできますが、当時の画商さんには顔は利いても今日ほどの資金の余裕は無かった様です。何しろ一年も前に謝礼という名の画料を準備するのは大変だったのでしょうか。それで百貨店では経理部へ依頼する事になるのですが、経理部としても資金繰りの都合もありましょう、又手形横行の時代に美術部だけにすんなり仮払いをしてくれるわけにはいきません。美術部に理解のある取締役員の口添えで経理部の窓口へ行きますと、やれ「また聖徳太子(当

時一万円札の肖像でした)が来たな。」とか、「お偉方を利用したな」等と苦言を浴びせられましたが、それを気にしていたら仕事は進みませんでしたし、この仕事が面白くなりかけていましたので、馬耳東風と決め込んで我慢致しました。そして、手の切れる様な万札新券を経理部で用意してもらい、奉書紙で折り包み、紅白の水引をかけ、「薄謝」と表書きして、のしをつけて目指す作家を訪ね、一年後の出品を依頼しに行くのでした。

新参の新設画廊のしかも青二才の担当者に有名巨匠作家がおいそれと会ってくれる訳など無かったのですが、それでも私は恐れ知らず喜び勇んで出張上京したものでした。

しかし案の定、失態を生じたことがありました。始めて「謝礼」を持ってある巨匠へ一年後の出品を依頼に行った時の事であります。ひと通り挨拶などして、「薄謝」をそっと差し出しました。その次に訪ねる作家の予定時間の事もあって、早く受け取りをもらおうと、「すみませんが簡単に結構ですがお印を。」と言うと、その作家は「そうですね・・・。」と答えただけで一向に何も書いてくれそうにありません。それで、もう一度「すみませんが、」と言った途端、作家はノートのようなものを引き出しから取り出してきて指でめぐりながら、「やはり予定が混んでいて会期に間に合わないかもしれない。迷惑がかかるかもしれないので折角ですが・・・。」と体よく断られ、差し出した「謝礼」を受け取ってもらえず持ち帰りますと、上司から大目玉、「どうして置いてこなかったのか」と大変叱られてしまったのでした。私は宮使い、当然受け取りを頂かねばと、作家に失礼と思い、「領収書」とは言いませんでした。お印を！」と弁解しましたが、「君!“お印”も“領収書”も同じ事だ！」と更に叱られる始末でした。おまけに、「年配の作家ですから謝礼を渡した後に万一の事があったらどうなりますか？」と尋ねたら、「君はそんな事は考えなくてよい。それは香典に代わるだけだ。」と嘲笑されましたが、おそらくその様な時は遺族から戻されてくるのだらうと後で理解致しました。

これも昭和40年代でしたか、当時の日展で時の新聞報道で話題になった、こんな騒動がありました。

先程申しました京都の中村岳稜という日本画巨匠の塾門下に、名古屋出身の中村正義と云う精鋭作家がおりました。彼は30代の若さでその才能を買われ、審査員のポジションまで抜擢されておりましたが、日展に、京の舞妓を大胆に扱った作品を出品しようと致しました。(お手許の一枚目をご覧ください。)ところが、師匠の岳稜先生から呼ばれ、「中村君、今年も良く頑張って力作ができたね。」とほめられた後で、「けれどね・・・。」正義先生は、「けれど先生何か？」と問い返しますと、「力作だけれどね・・・。」と言い難そうな様子に「どうでしょうか？」と再び問い返すと、「実は初日に天皇陛下がお越しになるので・・・。」と。それを聞いた正義先生は即座に「分かりました。私は日展を辞めます。」と即座に脱退してしまったのです。時に彼は37歳でした。

この作家は日本画の極限を突き破り、生活感情のないキレイ事だけの日本画を否定し、戦後日本の現実に立った日本画を追求したのでした。半世紀を経て今日評論家を始め

大方の高い評価を得ています。私はこの様に、純粹にそして真摯に制作する作家の姿を見るにつけ、そんな作品を顧客に紹介すべきとの想いが嵩じ遂に百貨店を退職して独立する事になってしまいました。

以来、美術商とは、物質的な絵画や彫刻そのものではなく、それ等の作品を通じて精神的な「感動」を商うものだと信じて今日に至っております。そして半世紀余りの年月を経て、そんな作品が今日評価され残っている事大変嬉しい事です。私なりに独断と偏見の職業倫理と自負しております。

さて、こちら稲沢から近い一宮市の妙興寺に隣接しております一宮市立博物館に行かれた方もあるかも知れませんが、その中庭に数羽の鳩や鳥が設置されております。これは11年まえに亡くなられました柳原義達と云う彫刻家の作品ですが、生前中、先生に北陸出身の元総理大臣の銅像制作の依頼がありました。

時の後援会が巨額の小切手を持参して依頼に来ましたが、先生はそれに目もくれずお断りになりました。それをどう勘違いしたのか、その後援会は小切手の額が僅少だったと思い、その金額を倍増して今度は文化勲章作家富永直樹先生へ依頼に行きました。今度は、その富永先生はその小切手にはまた目もくれず即座に引き受けた、と云われております。そして雪深い越後に立派な銅像が設置されました。

この二人の彫刻家について皆さんはどの様にお考えになりますか？・・・お金に係わらず仕事を受けない作家、お金に係わらず受ける作家・・・それぞれの仕事に対するポリシーの問題です。これも又ロータリーで云う多様性かもしれません。(2枚目、3枚目の写真です。)

さて、平成6年、10年前になりますが、名古屋の百貨店で、フランスでも活躍した彫刻家高田博厚先生の遺作展、(四枚目です。)をプロデュースしておりました時、一人の可愛らしい若い女性が来廊されました。失礼ながら、年配の男性ファンが多い中でしたから、強烈な印象が残りました。頂きました名刺に稲沢市荻須美術館学芸員とありました。その方が今、稲沢市荻須美術館館長の山田みさ子女史であります。この荻須美術館では、今日常に意欲的で見識高い企画展覧会を開催されている事に感銘と敬意を抱いております。又、ロータリーの分区会員の美術展開催にもご協力頂き、感謝しているところであります。

現在は主として物故近代作家の作品を国公立美術館等へ納めるかわら、東海地区の有望作家を名古屋の画廊で紹介し、そしてまた東西各地方へ紹介する展覧会のプロデュースをなりわいと致しております、その地方のロータリークラブでのメーキャップを楽しみにしておりますが、たまたまJR隣接のホテルでの静岡東RCに出席し、バナーも頂きましたが、時のクラブ会長静岡テレビの曾根正弘社長さんのご母堂が稲沢出身と聞き、その奇遇に感激を覚えました。

2006年(8年前)、小生クラブの社会奉仕委員を致しておりました折、一宮市内繊維緑地に設置されておりました此の清水九兵衛先生の作品が歳月を経て変色しておりましたのを見兼ね、クラブ予算を頂いて兼ねてより親交

を頂いておりました先生を京都に訪ね、修復をお願い致しました。

その後、この歌集のお表紙に作品を使用して頂きありがたく思っています。この本の作者の塚本文雄先生は、県立一宮西高等学校にも奉職されておられた由、小生の娘も同校の卒業生でして、当時昭和59年創立記念の碑を正面玄関に設置させて頂きました。

また、私共一宮北RCでは親睦を目的として(チラシの様な)「美術鑑賞同好会」を継続しております。機会があれば合同でお出掛けになりませんか？

以上そんなこんなで私の稲沢さんに抱く想いが拙い自己紹介になってしまいましたが貴重なお時間を頂きご清聴頂きました事を感謝致します。ありがとうございます。